

「～て」 依頼形をめぐって

趙彦志

はじめに

高橋太郎 1974¹ は標準語の動詞の活用体系をまとめるにあたって、「～て」形を丁寧系列に対立するふつう系列の依頼形として示している。その後、1975² の論著でも「～て(くれ)」形が依頼形として取り上げられている(ていねい形は「～てください」)。高橋は依頼形に関する立ち入った考察をしていないが、「～て」形の形態論的な位置づけを示していると見られる。

「～て」形は文の中において終止形として現れ、依頼表現の中心的な表現形式の一つとされてきている。終止的な「～て」形は「～てくれ」「～てください」形と同じように聞き手に対して働きかける意味を持つ点も含めて、文法的に三者似通う側面がかなり多いので、「～て」形を「～てくれ」或いは「～てください」形の省略された形としても異論は生じにくい。

だが、「～て」形の用例は量的に「～てくれ」「～てください」形より少なく、依頼表現全体においても「～てもらいたい」形³の下、第四位の存在である。量の多少を別問題にしても、「～て」形とほかの形との間に、共通な側面がある一方、対立する側面＝相違点も必ずあるし、それを明確に示す必要もあるのではないかと考えられる。このような立場から出発して用例を整理していくと、話し手の性別、他の形式との共存、終助詞の付加などの問題が浮上してくる。小論は主に小説からとりだした用例に依拠し、「～て」形のさまざまな特徴を明らかにすることを中心に論述を展開していく。高橋によって依頼形として一括されている「～て」形と「～てくれ」「～てください」三者の違いに関する内容は別稿に譲りたい。

1. 「～て」形の「話し手」と「聞き手」

1.1 「～て」形は終止形で依頼の意味の場合

依頼場面に登場する人物は限られているし、舞台での人物のふるまいも明らかなので、「～て」形はほかの働きかける文と同じように主語を明確に示す必要はない。村上三寿 1993⁴ は命令文の主語について「…はなし手のまえにいるきき手に対して動作の実行をもとめるのだから、文のなかに動作の

し手＝主語を明示する必要はなく、命令文では主語がかけているのがふつうである。」と述べている。依頼文も命令文と同様に、動作のシテを殆ど示さない。佐藤里美 1992⁵ は次のように述べている。「…、ふつう、この二人称の動作主体は、主語として明示されることはない。すべてのさそいかけ文がそうであるように、《してくれ》の文も、動作主体が聞き手であることを前提としており、主語はあえて必要としないのである。「～て」形は基本的にミウチ関係の人間の間で使われるので、命令形と同様に、シテを示さない方が普通である。「～て」形が文の中において終止的な機能を果たし、明確に依頼の意味を表す用例をここで示しておく。

- 1) 風野は奥の和室に衾子の布団を敷くと、ネグリジェを持ってきた。「さあ、着がえて」衾子は立上ると、のろのろと布団の方へ行った。『愛(上)』
- 2) 「ねえ、教えて、金さん……わたし、ほんとうに、変態なのかしら?」「くすぐったいから、そこへさわるのだけ、かんべんしてくれ」『はや』
- 3) 麻美は寝袋に入ると、顔を九鬼の胸もとへ寄せてきて、「抱いて…ねえ、抱いてえ…」小さくあまったれた声を出した。『誘拐』
- 4) 「先生がいいって言われたらいいけど、聞いてみるわ」「頼むよお。何年ぶりかなんだよ」石岡は、おがむまねをした。…、さっきの看護婦が、「石岡さん、書類書いて出して」と所定の用紙らしいものを持って来た。『白い』
- 5) 「そう、十円玉持ってる?」「ええ」「じゃあ、ここにに入れて」「はい」『青春』
- 6) 郁は、細い腕をさしのべて花びんをつかみ、振ってみた。「水が少いようだね。どれだけはいっているか調べて」「はい」多佳子は、花を抜き取り、花瓶の中をのぞいた。『赤い猫』

波線で示したように、文頭に呼びかけの感動詞「さあ」「ねえ」「じゃあ」やハダカ格の名詞などが使われて、聞き手の注意を引き寄せる。しかも殆どの場合には一定のイントネーションを伴って、聞き手に対して動作へのなんらかの心の準備を引き起こす。また、文の前後を見れば分かるように話し手は文の最後で上昇調を使って明確に聞き手に働きかけて、聞き手の「はい」或いは「いいえ」の答えを求めている。このような形の文を依頼文と考えていだろう。

書かれた文章でもメモのようなものだと、「～て」形が現れる。次の例は登場人物である子供の書いたものである。

- 7) 部屋のすみに包み紙みたいなものがあったので、それをちぎって色鉛筆で字を書いた。「…。殺される。この手紙を見た人、すぐけいさつに知らせてください。それから、公団住宅五号とうの杉岡に話をきいてください。早く。たすけて。六年　くぬぎ　究介」部屋の中はもうだいふ暗くなっていた。『一匹』

1.2 話し手の性別問題

1.2.1 「～て」形の話し手は主に女性である。

全体的に見て、「～て」形を含む依頼文の話し手は主に女性である。しかも、聞き手との人間関係を取りだしてみると、初対面の人間に対して殆ど使われていなくて、知り合い・友達・恋人・家庭メンバーなど親しい間柄やミウチ関係の人間に限られる。

- 8) 美佐子はうす笑いをして、「このまま朝までいて」「いたいな、まったく」『振り』
- 9) 「なにかな?」「とぼけるのは止して」「わからない、はっきり言ってくれ」『パ』
- 10) 「これに書いて」風野はしばらくそれを見てから、上衣の内ポケットからボールペンを持ってきて、書きはじめた。『愛(上)』
- 11) 「いいからもって。足もってて」片手に今採ったばかりのほうれん草をつかんで、塩子は言う。『海に』
- 12) 「パパ、今度の日曜日どこかに連れてって。弓ちゃんのパパなんか、毎週連れてってくれるんだから」『愛(上)』

これらの用例はすべて女性話し手からの発話である。しかも、話し手と聞き手は恋人同士(例8～11)、親子(例12)の関係である。

下の用例も女性の話し手である。聞き手は不特定の間人であって、話し手から「助け」を求められる。

- 13) 手に持っていた切符が落ちて、あっというまに人々の靴に踏みにじられる。「助けて!だれか、娘を助けて!」『春』
- 14) 「誰か来て。一来て。早く!」…外はまぶしいばかりの五月晴だった。『青い香炉』

また、動詞の語彙的な意味から見て、最終的に話し手の「利益」になるとは考えにくい例もある。

- 15) 「これだけは言ってくれ、相手はやくざか」あかねは血走った目で睨んだ。「真面目なサラリーマンよ、さあ、もっとなぐって、なぐり殺して!」『西成』
- 16) 「わたしがわるかったの。すみねはもう殺されてるわ。わたしを殺して」伸子は、がくがくと床の上にすわり込んだ。『乳色』

二つの用例は意味から見れば話し手が結果的に「利益」ではなくて、大きな「損害」を与えてくれと聞き手に求めている。このような文は話し手の「あきらめた態度」を表していて、周辺的な「依頼」表現となるだろう。

1.2.2 「～て」形の話し手が男性の場合

男性もまれだが「～て」形を使うことがある。聞き手との人間関係は女性の場合と同様に殆どミウチ同様の親しい関係である。下に挙げている例17)の話し手と聞き手は恋人関係であるのに対して、例18)は戦争時の仲間同士、つまり友達関係の二人の会話である。また、例19)の話し手「E君」も聞

き手の昔からの友人である。

- 17) 「そうか。その気になったら、いつでも来て」高原はそう言うと会社への道を走り出した。『想い出』
- 18) 「信子さん」と新也くんがいいながら立上る。「灯りを消して」「はい」と信子がこたえて、茶の間の灯りを消す。『終り』
- 19) 「飛行機の中で読んで。元気でね」E君は少し唇を歪めて、そう言った。『私が』
- 「～て」形の話し手が男性の時、聞き手は殆ど女性である。男性の話し手がここで「～てくれ」形を避けてわざと「～て」形を使ったのは聞き手に対する配慮のためと考えられる。しかも、聞き手が上位である用例が見られなくて、話し手と同レベル或いは下位の方が多い⁶。

1.3 「～て」形の動作の「シテ」

依頼を行うさいに、「話し手＝依頼する側」と「聞き手＝依頼される側」は二つとも欠かせない要素である。上述したように「～て」形依頼文の主語＝シテが殆どの場合示されていない。本節は先ずこのような用例を見た後、主語の示される用例の格形式を見ていきたい。また、聞き手が依頼を受けた後、結果的に聞き手のみ行動しなければならない場合もあるし、話し手から働きかけを受けた後、両者とも行動する場合もある（普通文中に「一緒に」のような副詞が用いられる）。ここでは中心となる前者のみを考察の対象にする。

- 20) 琴代は宿で呼んでくれたタクシーに乗ると、「福井駅まで。急いで」と命じた。『炎』
- 21) 「信子」と台所で妻の音がする。「お皿出して。お昼にするから」プラスチックのピクニック用の皿やコップだけを持ち出してきたのだった。『終り』
- 22) 船の上と岸壁で数人の男たちが動いてタラップがおろされた。「さあ、どうぞ、お気をつけて」加代子はあとからタラップを昇った。雨宮がそのあとにつづく。「おかえんなさいまし」『振り』
- 23) 凶器とおぼしき銀の一輪差しとピンクのバラも、華江の足元に投げ出されていた。「ああ、大変……しっかりとして……」『螺旋』

これら四つの用例はいずれも聞き手＝シテと話し手が文中にはさしだされていない。文脈（会話の前後関係や地の文）から分るので、あえて両者を明示しないのが殆どである。例 20) 21) は具体的な動作が求められていて、例 22) 23) の依頼内容は精神的な変化である。

1.3.1 とりたて形＋「～て」

今説明したように、動作のシテが主語として明示されないのが普通だが、「あなたが／君が～て」という形のように、主語があえて「が」の形によっ

て示されると、特定の人物を指定的にとりたてるニュアンスが現れる。また、例 25)「あなたから」では「いいだすひと」である側面が動作のシテに付加される。

- 24) 布切れでも当てているらしく、ぼやっとした女の声だった。「あんたが、…。そんならいっそ、あんたがお金持って来てよ。子供のパパさんに来てもらうつもりだったけど、肉親だと興奮して何をするかわかんないからね。…」『乳色』
- 25) その理由は、母と妻の双方から「あなたからお義母さんにいってよ」とか、「あなたから A 子さんにいってちょうだい」と責められるのは、…『男と』

格形式以外に、係助詞の「～は」「～も」のついた形で動作のシテを表すことがある。以下二つの用例において動作の「シテ」は「は」「も」など係助詞によってとりたてられている。「も」が使われると、「シテ」は複数存在することが読み取れる。

- 26) 「ね、お父さんたちはゆっくりして行って。あたし、一足先に帰って何か夜食の仕度でもしてるから」『わが』
- 27) さっきまで蒼白に近かった顔色は、すっかり血色を取り戻し、肌もつやつやと輝いていた。「櫛森くんも、早く入ってきて」「ああ…。俺の部屋で待っててくれ。そこだから」ドライヤーを手渡すと、紀子…。『青の炎』

そのほか、次の例のようなとりたて＝限定の意味を表す「だけ」も用いられる。副助詞「だけ」が文中に使われていて、動作のシテ「あなた」が限定される。

- 28) 「御飯は?」「食べたくないの。悪いけど、あなただけ向うの家へ帰って、食べて」『愛 (下)』

1.3.2 「ハダカ格」+「～て」

動作のシテを指し示す人名詞の後に、格助詞も係助詞もこない「ハダカ格」の用例は次のようなものである。なお、前に挙げた例 14)「誰か来て」もハダカ格の例である。

- 29) 産婦に激しい陣痛がきた。「痛い、助けて、先生助けて、痛いよ」『恋人たち』
- 30) 「仕事場だけど、ママはどうした?」「いないの。今日は急に用事ができて帰れないかもしれないって、パパ早く帰ってきて」『愛 (下)』

この二例はいずれも話し手にとって緊急時の依頼である。ただし、人名詞が格助詞によってかたちづけられないハダカ格の場合、名詞と後の文とのつながりが弱くなっているように思われる。例 29) 30) の「先生」「パパ」も、つづく依頼文と息のきれめなく発言されたとしても、主語としてシテをしめすのではなく、後ろに句読点が来た場合と同じく、呼びかけの的であると見る見

方もできるかもしれない（その点では例 14 はシテが主語であるだろう）。

人名詞の後ろに読点がつく場合、文の中において独立語⁷の役割を果たすと考えられるのに対して、後ろに句点がついてくれば、独立語文になる。いずれも「呼びかけ」の機能を果たして、依頼文から遊離的になり、つながり関係が弱くなる。句読点によって用例を分けようとしても、つながりの強弱には殆ど差がつかないが、読点の場合より句点のほうが名詞の独立性が強くなるのだろう。

31) 「モリ、聞いて」そんなある日、学校へ来るなり、アコがとびついて来た。『青春』

32) 「痛え、何をしゃがる！」笑楽は流石にさよを打とうとはせず、すみをつきはなしたが、「お父ちゃん、堪忍してえ」とさよが詫びると、… 『あざ』

33) 「雅哉くん。しっかりして。雅哉くん」肩で揺り動かすと、雅哉くんは、ぼんやり目をひらいた。「浅田先生！」 『うさぎ』

34) …、根もとだけは浸っていたので、しおれはしなかったのであろうが。「多佳子さん。足もとのじゅうたんに触って。濡れているかどうか」多佳子はしゃがんで、じゅうたんを手でなでまわした。「濡れていません」 『赤い猫』

35) 二人は祖母の間と定められた奥の十畳で左右に臥せらなければ承知しないのでありました。「ばば様こちら向いておくれんし。」「いやよう、わしの方向向いて。ばば様。」私たちは祖母の右枕、左枕についてさえその愛を争いました。 『死』

次の用例の主語は聞き手を指し示しているが、人の名前ではなくて称号、職業名を使っている。

36) シンシアはデスクの上に広げた書類に目を落としていたが、身体をおこすところにとっこりと微笑んだ。「いいえ、大佐。どうぞ中へ入って」 『スー』

37) 「あっ、駄目っ！看護婦さん、来て！」わたしは、とびつきながら叫んだ。『子を』

例 36) 「大佐」の呼び方は軍隊の階級名であって、その後に「さん」「くん」などをつける⁸。また用例 37) は病院でのいい方であって、「看護婦」という職業の人間を呼ぶときに「さん」をつけていうのがもっとも一般的であろう。

「呼びかけ」の形と述語「～て」形との相関を見ると、「～て」形では「～てくれ」形より話し手が呼びかけ形式の選択範囲が広がって⁹、「呼び捨て」「～君」から甚だしく尊敬した形「～様」¹⁰まで、幅広く「～て」形が用いられる。

2 副詞と「～て」形の併用

依頼表現において話し手は自分の意図を明確に聞き手に示すために、陳述副詞をよく用いている。陳述副詞は文全体の依頼程度に強め、和らげなどの効果をもたらす。工藤浩 1982¹¹、高橋 2005¹² はそれぞれ陳述副詞の下位分類及び定義について触れている。陳述副詞以外の「程度副詞」なども小論と関わってくるので、それらの関係にもふれておく。

2.1 陳述副詞

依頼とのかかわりの点で、同じ陳述副詞グループでも意味の強弱によって大体二つに分けられる。「どうぞ」「どうか」「きっと」などは文の依頼性を強めるが、「とにかく」「ともかく」はむしろ控えめになり、文全体の依頼性が弱くなる。

- 38) 船の上と岸壁で数人の男たちが動いてタラップがおろされた。「さあ、どうぞ、お氣をつけて」加代子はあとからタラップを昇った。『振り』
- 39) 「なんとお礼を申しあげてよいやら——あの、源三郎さま、こちら様のおかげで、こうしてあなた様のもとへ連れて来ていただくことができました。どうかお礼をおっしゃって」源三郎は迷惑顔、「……—」『日光』
- 40) 「きっと、一緒にいられるようにして。約束よ」衿子はそういうと、さらに風野の盃に酒を注ぎ、自分のにも注いだ。『愛(下)』

「どうぞ」「どうか」「きっと」などのような副詞が頻繁に依頼文の中に現れ、話し手の強い依頼の気持ちを映し出す。これ以外、話し手の更に強い感情を表す「ぜひ」「何とか」のような副詞と「～て」形との併用が殆ど見られないことから、「～て」形は話し手の最高度の切実な感情を表す機能までは持っていないのかもしれない。

次は依頼性が弱くなったり、やわらげられたりする場合の用例である。依頼性がやわらげられると聞き手に対する配慮の気持ちがうかがわれるようになる。

- 41) 英世は、妻がバスルームでシャワーを浴びているのもかまわず、駆け込んでいた。…「おめでとう、でもとにかくここから出て行って」『遠き(下)』
- 42) 「ここではあんまり内密の話も出来ないから…… ともかくも外へ出て」と、連れ出して来たのであった。「どこへ行くのだお浦、ひどく寂しい方へ連れて行くではないか……」と、典膳は、お浦の肩へ手をかけようとした。『血曼』

上に挙げた以外の連用成分が使われることによっても、文の依頼性が変化する。「お願いだから」のような陳述副詞的な機能を果たす形は、文の依頼性をさらに強化させるようである。

- 43) 「ね、お願いだから拍手して」彼女は、カンカン踊りみたいに……「ね、お願いだから拍手して。でないと私止まれないよ」拍手の代りに彼は後から、…『海に』
- 44) 「お願い、早く助けて、カイ！私は…ここよ。…地下道を走っているのよ。…地下の大きな駐車場にいるのよ。あー、早く、一刻も早く助けに来て。…」『カイ』

一方、依頼の意味を和らげる陳述副詞的な成分は、「わるいけど、すまないが、～できなら、できれば」などである。例46)の「出来たら」は必然性を否定し、聞き手に選択する余裕を与える。

- 45) 「御飯は？」「食べたくないの。悪いけど、あなただけ向うの家へ帰って、食べて」『愛(下)』

- 46) 「そろそろ相談している——別にいそがないのさ」「それがいいわ、出来たら見せて」「ええ。是非みて貰う」『二つ』

2.2 程度副詞

程度副詞も依頼表現の依頼性の強弱にかかわってくる。

- 47) 「もつと伏して」敵の前で、尻を敵に見せて、…。人々は、後方へ後方へと、すさり始めた。『近藤』
- 48) 「まあ、もうちょっとそやっついて」多計代もこの調子では夕飯のために外出はできまいから、いっそ、みんなうちで、日本弁当をとどけさせてすませるのも一つの方法だと伸子は思いついた。『道標』
- 49) 「ああ美味しい。どう、もう一杯欲しくない」「うん、もう少し濃くして」「あなたは——お房さん」「もう沢山」『氷蔵』

最初の例は動作の程度を強調する一方、残りの「もうちょっと、もう少し」などは控えめに量の程度を表している。これらの点で、前者は依頼性の強化に、後者は依頼性の和らげへと連続するようである。

次に挙げる用例は情態副詞¹³と言えるかもしれないが、「程度性」も感じられるという点から、上につなげて挙げておく。

- 50) あわてて飛びのく警官たちを無視し、トレーラーは始たちの前で徐行しつつ後部ドアを開いた。「乗って、早く乗って!」中国風のなまりをともなった日本語の叫びが聴こえた。『創竜伝6 染血の夢』
- 51) 伊川治は思わず涙ぐんで、麻里子夫人に強い親愛の情をおぼえながら、その小切手を押しいただいた。「額面をよく見てね」「うん、二十万か、たすかる」『男下』
- 52) 「鍵、閉めてくれた?」「——ああ」「ナポレオンなら、そこにあるから、じゃんじゃん飲んで」『悪魔』
- 53) このほうは、テープをとったわけではないので、話すたびに細部がすこしずつ食い違う。「正確に。一ちゃんと正確に話して」郁は、いらだった。『赤い猫』
- 「早く」のような副詞成分は聞き手に対し、「促し、催促」の働きを持つ。これらの例は情態的な意味とともに、程度的な意味もつきまとうようである。

3 「～て」形と終助詞「ヨ」「ネ」

終助詞付きの「～て」形（～テネ、～テヨ）用例数は合わせて用例全体の三割を占めている。「～て」形は文中で一体どのような役割を果たすかについて、仁田義雄 1991¹⁴の論述を見ておく。

(略)「連用形+テ」の形式には、＜肯定事態への働きかけ＞と＜否定事

態への働きかけ>の形がある。「ヤッテ」と「ヤラナイデ」がこれである。<働きかけ>の<発話・伝達のモダリティ>への固定度は、「オヤリ」型の方が「ヤッテ」型より高いただろう。「ヤッテ」型では、「連用形+テ」の形式単独のもの（「ヤッテ」）より、それに「ヨ」や「ネ」の終助詞のついたもの（「ヤッテヨ」「ヤッテネ」）の方が、固定度が高い。文末等価であることが、「ヨ」「ネ」といった終助詞の付加を可能・容易ならしめている、と言えるし、また、終助詞「ヨ」「ネ」の付加が、文末等価性を高め、「ヤッテ」の<発話・伝達モダリティ>の固定度を高めている、と言えよう。

仁田の主張しているように、「～て」は単独で現われる場合もあれば、終助詞と組み合わせて、「～てね」「～てよ」等の形で依頼の意味を鮮明に表すこともある。終助詞の働き「固定度を高める」についても仁田が取り上げているが、終助詞ぬきの単なる「～て」形が七割を占めることは、すでに終助詞ぬきの「～て」形で終止形式として安定していることを示すものではないか。命令形の場合の、命令形単独とシロヨのような終助詞のついた形との比率（命令形の場合、シロネは少なそうだ）を確認しておく必要はあるが、「～て」形の七割という比率からは、「～て」形そのものを形態論的な依頼形へと持っていきやすいと言えそうである。この点の確認は別として、以下では「～て」形を補強する終助詞の意味・役割を見ておく。

3.1 「～てよ」依頼形について

3.1.1 話し手が女性の場合

話し手が自分の利益に基づいて、聞き手に行動させる例文を挙げるが、女性の話し手が中心である。

54) キッピーは、よそよそしく、「私も知らないわ。それじゃア、四人とも、知らないのよ。たぶん、五人目をさがすといいわ」そう呟いて、「帰ってよ」小犬を追い出すような、無情な様子で睨みつけた。『街は』

55) 「ちょっと早かったけど、いいかな？」と僕もどなりかえした。「かまわないわよ、ちっとも。二階に上がってきてよ。私、今ちょっと手が放せないの」そしてまたガラガラと窓が閉った。『ノ』

56) 「ねえ、せっかくつくったんだからもっと食べてよ」いわれて、茶碗蒸しから手をつけてみる。「うん、なかなかうまい」『愛（下）』

用例中の話し手は自分の利益のために聞き手に働きかける。例 56) 「食べる」という動詞は聞き手の利益になる一方、多少は話し手の利益も絡んでいて、その点で「双方のため」とも解釈できる。

次の例 57) は聞き手が行動し、一次的には聞き手が利益を受け取る場合

である。波線部のような、場面に関する補足の働きを持つ文によって分る。例 58) は母がわかってくれることは話し手の利益であり、母がわかってくれて気が狂わないですむこと（それに話し手が「なんとかする」こと）は聞き手の利益でもある点では、例 56) のように「双方のため」と言える。

- 57) 「ねえ、会社やめてよ。そんなイヤな思いまでして会社にいる必要はないもん。
あなたにみじめな思いをさせたくないわ」「どうでもいい。ほっといてくれ」『想
い出』
- 58) 加代子は、久乃の気が狂うのではないかと急におそろしくなり、久乃を抱
き起こした。「母さん、わかってよ。しかたがないわよ。大丈夫よ。私が何と
かしてよ。だから母さん、気をたしかにしなきゃ駄目よ」『振り』

依頼文で話し手ではなくて、第三者のために聞き手に働きかける意味を表す「あげる、やる」や、やりもらい動詞「～てやる」「～てあげる」などに終助詞のつく例も主として女性が使う。

- 59) 「いくらだい。宿泊料は」「半額にまけとくわ。千円」長平はポケットからむきだしの札束をつかみだして、二千円やった。「さすがに先生はお金持ね。あの子たちにも、いくらか、あげてよ」長平はもう二千円やった。『街は』
- 60) 「だって、たいへんよ。あの奥様に、あんたが病気で楽屋で寝ていると、あたし、いわれたとおりにいったのよ。…。あたし困っちゃったわ。あんた、ちよつとあってあげてよ」「あら、困ったわねえ」『爆薬』

以上の用例をまとめて考えれば、話し手が女性の時の「～てよ」形は依頼形の諸特徴を持ちつつ、聞き手に対する「注意・非難・叱責」などの感情・態度的なニュアンスを加えている。

3.1.2 話し手が男性の場合（聞き手と親子の関係）

男性話し手の用例もあるが、女性の話し手に比べて量は極めて少ない。しかも、聞き手は主に家族メンバーのようなミウチ関係の人に限られる。これらの点で終助詞のつかない「て」形と同様である。

- 61) 「ねえ、ママ。子とろ女って、やっぱりほんとにいるんだって」園から帰った哲彦は、かばんをおろすのももどかしく言い出したのだった。「僕怖いよ。ハンカチのお人形作ってよ」『子を』
- 62) 秀一は、母親の煮え切らない反応に苛立った。「そう、じゃなくてさ。きちんと、加納先生に相談してみよ。力になるって、言ってたからさ」『青の炎』
- 63) かくして母と妻とのあいだで争いがおきたら、夫はひたすら頭を低くして嵐が過ぎ去るのを待つだけです。それだけでは収拾がつかないときには、最後の手段として親父に「親父からお袋を少しなだめてよ」と頼むこともあります。『男と』

この三例は息子から自分の親に依頼する場面である。最後の一例はアクチュアルな会話ではなく、また話し手はすでに成人であるが、「父親」との会話として、親子関係が存在している点は、ほかの用例と同様である。

3.1.3 伝えるコトガラの面から見た「～てよ」形について

話し手が会話中にすでに依頼するコトガラを切り出したが、その内容が明確でなく、聞き手が気づかないままなので、再度依頼する時に「～てよ」形がよく使われる。一回目の依頼内容より「～てよ」形の依頼がもっと具体的な内容を指し示す場合が多い。

- 64) 「…子供のことなんて、私に一番に話してよ。専務より先に私に話してよ!」エレベーターボールまで来ても、るり子の怒りはおさまらなかった。『想い出』
- 65) 伸子は手をうって笑った。「オフエリアはいつ出て来るの?お父様、オフエリアを出してよ、わたし出るわよ」と、ふざけた。『二つ』
- 66) 「お願い?」「ねえ、トッチを帰してやってよ。まだ赤んぼだもの、かわいそうだよ。…僕はここに来ることをだれにも言って来なかったしさ。だからさ。頼むよ。トッチだけは帰してやってよ」『恋人と』

聞き手に対する依頼が一般的な内容から具体的な内容に変化するに伴って、依頼の程度も強くなる。例 66) は副助詞の使用によってだが、後ろの文が最初のよりもっと限定的な内容を示している。

- 67) 「殺してごらん。私のクビを、しめてごらんよ。人殺し、なんて、叫びたてやしないから。音をたてずに、死んでみせるから、安心して、しめてよ。ちょっとした呻きぐらい、でるかも知れないけど、…」「フ」『街は』
- 68) 思い出した彼女は泣いたのだ。そして狂ったように叫び始めた。「…そんな子がどうして人に愛されたりするわけ?ねえ、どうしてよ、教えて頂戴。…ねえ、誰か教えてよ、ねえ、早く教えて頂戴。そうよ、あなたがいいわ。…」『カイ』
- 69) 「あたしに何の用?あたし、あんたみたいなひと、嫌いだって、そうはつきり言ったはずよ」「酔ってるんだな」「酔って悪いかしら、こっちの勝手じゃない。それより、話って何なのよ。早く言ってよ。」『わが』

例 67) は話し手が聞き手に「殺す」という動作を要求する場面である。要求の内容が先に提示され、その後には話し手の意志が更に固まって聞き手に強く働きかけていく。例 68) の言い方が丁寧な言い方からストレートな言い方へ変った。また、最後の例も口調が最初のより一段と強くなる、依頼表現において「～よ」がつく場合、言い方がだんだん強くなるのはよくある現象である。

3.2 「～てね」形の問題について

陳常好 1987¹⁵ は「ね」の働きかけや勧めの文に使われる時の機能を次のように述べている。

(略)「よ」のばあいは、そのようにすることが聞き手にとって必要なことであるという結論を話し手がもっていて、その必要性を聞き手にも認識させる目的で話しているのに対して、「ね」のばあいには、話し手が聞き手に同意をえられることを期待して発言しているように思える。

ここでもやはり、聞き手の認識を媒介にして話し手の認識を成立させようというはたらきがみられるように思えるのである。

命令・依頼などの働きかけ表現は、話し手が聞き手に求める動作に関して、動作をめぐる認識の度合いが一方向的に話し手のほうへ傾いていて当然である。「～てよ」の場合はその認識のギャップをストレートに反映するため、きつい表現になる。一方「～てね」は、聞き手もその動作に関して認識を持っているかのように、話し手が語りかけることによって、表現が和らげられてくる。

「～て+ヨ」の形は話し手が聞き手に聞き手の動作＝行為の必要性に関する認識を高めさせようとして、動作を強調していることが読み取れる。それに対して、「～て+ネ」の場合は、話し手は聞き手に行動を求めているが、そのことに聞き手が同意することを期待していると考えられる。

こうして、「～てね」形は「～てよ」と違って、聞き手に対する態度が和らげられることになるため、「非難・叱責」のようなマイナスの意味が見られない。聞き手のための「励まし」の意味を表しているというのが適切そうである。

70)そこが辛い。子供をなくした須美子の手をかたく握って、伸子はやっと、「しゅかりしてね」ということができただけだった。『道標』

71)すると、そろそろこの繰り返しの会話にも飽きてきた由美子、「じゃ、明日ね！」
「うん、明日！」「舞台頑張ってね!」「うん、ありがとー」『私が』

72)「先生、絶対八十歳まで生きてね」「どうして」「先生が八十代になれば、私が五十でしょ。それ以上の私を先生に見せたくないの」『恋人関係』

動作のシテは聞き手のみである。しかも話し手にとって動作への関与はできない。例 72) は聞き手の意志がかかわることのできない自然＝生理現象なので、話し手の「願い」的になる。

「～て」形に終助詞「ネ」のついた形が数多く存在することは、「～てくれ」形に比べた時の「～て」形の大きな特徴である¹⁶。また、「～てくださいね」¹⁷のような用例も数多くあることから、「～て」形と「～てください」

形が同じ丁寧系列に入っていることが考えられる。

4 「～て」形が尊敬動詞の場合

動詞の待遇性を問題にした時、尊敬系列の語形が「～て」形と組み合わせさつて依頼文を作ると、話し手の聞き手に対する配慮の気持ちが示される。

73) 「もしもし、あなた映画見るでしょう。内で一緒に切符を買うと少し安くなるのよ。見たい映画があったとき、おっしゃって。一緒に買ってあげますよ」とすると電話の向うで、竹越夏代は即座に答えた。『振り』

74) 「柿落としというのは聞くが、緞帳落としは初耳ですね」インタビュアーが城吉を相手にメモをとっていた。傍であいづちを打ちながらきいていた若嶋雄司郎が、「おや、秋子嬢さん、どうぞお入りになって」と座蒲団をすすめた。『旅芝』

75) 「看護婦に小さい机を借りて、その上へ載せようと思ったんですけども、まだ持って来てくれないから、しばらくの間、ああしておいたのよ。本でも御覧になって」お延はすぐ立って床の間から書物をおろした。『明暗』

以上の用例を見る限り、話し手は自分のためより聞き手のために働きかけている。今まで見てきた「～て」依頼形は目上の人間に対して殆ど使えない形だったが、ここに見るような尊敬動詞は、用例数はそれほど多くないが、「～て」形をとって依頼の形となることができる。

なお、聞き手の動作を求める依頼表現では、話し手の動作の待遇性にかかわる謙譲動詞と「～て」形との併用は、当然ながら依頼形式として成り立たない。

5 他の形式との共存

「～て」形は依頼表現の諸形式以外にも他のさまざまな形式と共存することができる。以下でそれぞれをとりあげることにする。

5.1 「～て」形自体の共存（並立）

まず、一つの依頼文において「～て」形が二つ連続して表出される場合から見ていこう。このような二重表現形式は依頼の意味を強調する効果が含まれる。

76) ……その一瞬について、良夫は清治の腕を振りほどき、火の中へと飛び込んだ。「おとうさん！」「やめてッ！やめてッ！」だれもが絶叫したが、良夫はあつという間に炎と煙の中へ消えていった。『想い出』

77) 「どうだ、そんなにいたいかね。男の子だ、がまんをして、がまんをして」とお爺さんはしきりに一彦をいたわっています。『怪塔王』

例 76) は話し手が聞き手の動作停止を求めるのに対して、例 77) の「がまんをする」は聞き手の心理的な変化を示している。

以上の例文中にさらに副詞の機能を果たす「お願い」「早く」などを差し入れることができる。そうすると、以下のように場面の緊迫性が高くなる。

- 78) 「パパ、パパ。怖いよ、助けて、お願い早く助けて!僕は、何か…とても大きな…神様に食べられてしまう。」カイが喋ったのは、たったそれだけだったけれど、カイの瞳は瞬間、カッと見開かれ、父親の瞳を正確に捉えていたのだ。
『カイ』

- 79) あわてて飛びのく警官たちを無視し、トレーラーは始たちの前で徐行しつつ後部ドアを開いた。「乗って、早く乗って!」中国風のなまりをともなった日本語の叫びが聴こえた。逡巡する余裕はなかった。『創竜』

これらはすべて一つのコトガラをめぐって聞き手に働きかける時の場面である。同じ聞き手に対して違うコトガラを働きかける時の用例もある。

- 80) 「こっち向いて!おかあさま。このひとも牛の子にして」電燈を消そうという気になる者のいない寝室で、妻と二人の娘が一つ寝台の中でごたついている光景を、泰造は隣りの寝台からまばたきもしないで眺めていて、笑った。『道標』

- 81) 「受け取って。持って、いて。なくさないで、ね」少女は真剣な瞳でエドワードを見据えた。ハンカチーフをそっと受け取る。泥と血が滲んでいる。「これを、渡して。あたしに。四十五、年、経ったら。あたしを、見つけて。きっと」ほとんど声になっていなかった。『エア』

同じ「～て」形が複数に使われて、それぞれ違うコトガラを示している。例 81) の話し手である「少女」はすでに死を覚悟している。依頼のコトガラはそれぞれ動詞「受け取る」「持つ」「渡す」「見つける」によって示されていて、丁寧度に特に差が見られない。従って依頼の程度もほぼ同レベルだと考えられる。

5.2 「～て」形と命令形「～なさい」との共存

「～なさい」は命令形の基本形式の一つとして、活用体系を取り上げる場合は丁寧系列の「～ます」形式の命令形にあがっているのが普通であるが、「～ます」形の諸形式と違って上位者に対して使用することができないなど、特殊である。用法的には命令形の中において「しろ」よりやや丁寧な形という程度である¹⁸。

- 82) 「やっぱりおまえは、あの男のところへかけこむつもりだな」「いやらしい想像はやめて。うそだと思ったら、三十分後に咲子のところへ電話してなさい。わたしが出ますから」『女の』

- 83) 「なんしてるの?あなたたち!やめなさい!やめて!」友子は、秀一と曾根の間に割って入った。『青の炎』

用例の話し手はすべて女性である。「～なさい」形でなく命令形「しろ」

との共存の例は見つからなかった。

例外は「いらっしゃる」の命令形「いらっしゃい」だが、この形は待遇性を伴っており、特別と言えるだろう。

84) 「ね、たびたび遊びにいらっしゃいよ、ごく気楽に来てくださればいいわ、あたし、いつだってヒマで退屈してるんだから、話に来て。」といった。『ほとけ』

5.3 「～て」形と「～てくれ」系の共存

85) 「助けてくれえ！誰か、助けて！」男は地面に這いつくばって、そう叫んだ。『カイ』

86) 「池袋。駅。ちょっと来てくれない？」「どうしたの！？うちへ電話したの？お母さんが心配して電話じゃんじゃんよ」「とにかく来て、お願い、お金と、パンティ一枚もってきて」『不吉』

「～てくれ」形のせいも、女性の話し手は少なく、「～て」形の中では話し手は男性に集中する。例85)「～てくれ」形は、特定の聞き手はもちろん、不特定の聞き手を想定しての発話ともいいにくいとしたら、感動詞化してきているかもしれない。つづく「～て」形では不定の「だれか」ながら一応聞き手を想定しているといえる点では少なくともはじめの「助けてくれえ」よりは依頼性がある。例86)の共存形式は命令形ではないが、丁寧系列でなく「～てくれ」をかかえこむ普通体の形なのでここに挙げておく。ただし、共存形式が命令形でないせいもあってか、この話し手は女性である。

5.4 「～て」形と「～てください」形の共存

87) 治子「待って！待って下さい！」声「何か訊くことがあるのか？」『死者』

88) 「誰だ」「騒がないで下さい。いまあなたの連れの女のひとの首筋にジャック・ナイフを押し当ててある。気をつけて」『わが』

「～てください」形は「～てくれ」形の尊敬形式にあたり、「～て」形より丁寧な形である。例88)「気をつけて」形は一般的に聞き手のために使われる依頼形式だが、ここで直接第三者「連れの女」のためになっていて、第三者と同じグループの人間＝聞き手も間接的に利益のウケテになる。

「～て」形と「お～ください」形の共存が一例ある。私的でない場で用いられている。はじめは場面の切迫性から待遇性を考慮しない依頼形式を用いているが、次ではその場での人間関係に配慮した結果、尊敬表現になっている。

89) 「こちらを向いて」警官は懐中電灯の光を黒江の目に当て、探るような目つきでその奥をのぞきこもうとする。「酒は飲んでいませんね。免許書はいいです。ご苦労さま。気をつけてお帰り下さい」『わが』

用例は警官の職務質問場面である。疑いの程度が高いレベルから低いレベ

ルに変化するにつれて、言い方も丁寧になるようである。

5.5 「～て」形と「～てちょうだい」の共存

例 90) のように「～て」形が「～て頂戴」形より先に使われている。話し手の心理的な圧迫感がストレートに出たが、次にそれを自ら抑制して丁寧な発言になっている。また例 91) においては二つの形式が逆に現れるが、話し手の生理的な苦痛がますます増大してきていると考えられる。

90) 「ね、放して」反対に強く締めつけられた。真知子はその係蹄の中で身悶えをし、朗らかに少年のように笑った。明日また来る約束をしてもいいと云った。
「ですからもう帰して頂戴」『真知子』

91) 「お母さん、僕のお腹の中でお菓子が踊っている。ああ、苦しい苦しい。堪忍して頂戴、もう決してお菓子を食べませんから。アー、イタイ、イタイ。お母さん、助けて助けて」と、五郎さんは汗をビッショリ掻いて、…。『お菓子』

「～てちょうだい」形は「～てください」形よりやや丁寧だが、主に女性や子供によって使われる。90) は女性、91) は子供の例である。

5.6 「～て」形と「～てほしい」形の共存

「～てほしい」形は動作のシテ＝話し手が話しの場面にいる場合といない場合と二つに分けられる。シテはもし現場にいなければ単なる話し手の希望を表している。話しの場面に聞き手がいる場合、「～てほしい」形は「～て」形と同じように働きかけ性を持っていると考えられる。

92) 「今年是一緒にいて欲しいなあ」「そうだな…」風野が曖昧な返事をする、
衿子は体をのりだして、…。「きっと、一緒にいられるようにして。約束よ」
衿子はそういって、さらに風野の盃に酒を注ぎ、自分のにも注いだ。『愛(下)』

93) 「よして!」と、美佐子は叫ぶように言って顔を拭くのをやめて姉を見すえた。
「同情なんかしてほしくないの」『振り』

最後の用例否定形の「～てほしくない」が使われて、意味的に聞き手の「同情」を断っている。

5.7 「～て」形とさそいかけ(勧誘)「～よう、～ましょう」形との共存

「～よう」、「～ましょう」二つの形式の丁寧度は違うが、用例数がそれぞれ少ないため、まとめて扱っておく。

94) 「下へ降りましょう! カメラを持ってきて」いうより早く、エレベーターのところへ走った。あとから、スタッフも追いついてきた。『花嫁』

95) 秀一は、さっとカバンを持って立ち上がった。「あ、待って待って。一緒に
こう」紀子が言ったが、かまわず、秀一は教室を飛び出した。『青の炎』

以上の例文から示したように、「～て」形は他の形式「～てくれ」系、「～てください」「～てほしい」「～て頂戴」「～よう、～ましょう」形のみならず、命令形の「～なさい」形までとも共存できる。ただし、強い命令な意味を表す動詞の命令形「しろ」と丁寧な依頼の意味を表す「～て頂けますか」などの形と共存する例文は見つかっていない。

なお、5で説明したように「～て」形に命令形「しろ」と共存の用例が見られないことと、4、尊敬語との組み合わせがあることの二点は「～てくれ」依頼形と大きく異なる点である。依頼表現の「～て」形は「～てくれ」形より丁寧な形であることもこの二点から説明できるのではないかと考えられる。ただし、高橋 1974、75 のパラダイムでは、「～て」形は「～てください」形と同じ丁寧系列にはおさめられていない。この点はなお検討をつづけたい。

6 おわりに

小論のテーマ<「～て」依頼形をめぐって>は<依頼表現「～てくれ、～てください」の考察—日中対照研究を目指して—>をうけるものである。高橋 1974、75 はパラダイムを示しているものの、いわばホネグミの提示だけで、具体的な説明—依頼形としてたつことの根拠、証拠は示していない。こうして、筆者は先ず高橋 1974、75 が提示したように、依頼表現をになう「～て」を形態論上の依頼形と見ることができかどうかについて、「～て」形の表現面、内容面にわたる文法的な特徴を明らかにすることを中心に検討してきた。形態論なあつかいに直接かかわるとはいえない語用論的な特徴にもふれたため、記述がふくらんでまとまりのない感じになったが、その中には筆者にとって今のところ形態論にかかわる現象／事実とはとらえられないことでも、将来は「～て」形の形態論的なあつかいに役立つことがあるかもしれない。こういうことから今のところ、気づいたことは取捨しないでとりあげることにした。しかし、なお「～て」形の形態論的な位置づけについての決定は保留したい。高橋 1974、75 のあげる「～て」「～てくれ」「～てください」それぞれの記述を深め、更に相互の対立を検討することによって解決を目指したい。

註

- 1 高橋太郎 1974『言語生活』270号「標準語の動詞と京都弁の動詞」(のち1994『動詞の研究』むぎ書房にも所収) P14
- 2 高橋太郎 1975『幼児語の形態論的な分析—動詞・形容詞・述語名詞—』(国立国語研究所 秀英出版) P12
- 3 「～てもらいたい」形に関する用例は次のようなものである。<「姉ちゃんって、あたし、いやよ。山吹桃子さん、と言ってちょうだい。」「…。で、おりいって頼

- むんだけど、この封筒の中の金を受け取ると、どうも、まずいことが起こるんだ。だから、お願いだから、やっぱり返してもらいたい。あんたを、はなしのわかる女と見込んで、このとおりに頼むよ。」『明日』>
- 4 村上三寿 1993 「命令文 -しろ、しなさい-」 (『ことばの科学6』 むぎ書房) P 70
 - 5 佐藤里美 1992 「依頼文 -してくれ、してください-」 (『ことばの科学5』 むぎ書房) P 111
 - 6 男性の「~て」には、中止形とまぎらわしいものが出てくる。それも含めて中止形をはじめとする「依頼形」以外の形式と依頼形とされるものの区別に関しては別稿で論じたい。
 - 7 「独立語」「独立語文」の用語は<鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』(むぎ書房) P117>に従ったものである。
 - 8 ただし、<分隊長を除くと、ただ一人の軍服兵である山田二等兵は、「分隊長殿、この壕の右翼はあのままにして、…」木山捷平『大陸の細道』>のように軍隊の場合でも「~殿」は使われる。だが、これはあくまでも特殊な呼び方であろう。
 - 9 この点に関して、「~て」形は「~てください」形と共通点多くて、両者は共に「~てくれ」形と対立している。<趙彦志 2007「依頼表現「~てくれ、~てください」の考察-日中対照研究を目指して-」(『対照言語学研究』17) 海山文化研究所>を参考。
 - 10 「~様」の形は現代日本語の話し言葉ではもうあまり使わない形である。(「お客様」という呼びかけや接客業関係のマニュアル敬語的な「~様」のような例はある。)
 - 11 工藤浩 1982「叙法副詞の意味と機能-その記述方法をもとめて-」(国立国語研究所『研究報告集3』秀英出版) P 46
 - 12 高橋太郎ほか 2005『日本語の文法』(ひつじ書房) P 149
 - 13 情態副詞とは「動詞のしめす運動や情態の質・ようすをあらわす副詞」である。(高橋ほか 2005の規定)
 - 14 仁田義雄 1991『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房) P236
 - 15 陳常好 1987<「終助詞 -話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞-」(『日本語学』6-10 明治書院) P 93>なお、引用部分は<高橋太郎ほか 2005『日本語の文法』(ひつじ書房) P236>にも紹介されている。
 - 16 「~てくれね」形式は非常にまれである。筆者の手もとにも一例しかないが、一応示しておく。<「とんだカンパがはじまったもんだな。じゃバット一箱分喜捨するよ。その代りよく僕の名をつけといてくれね。僕がクビになったら大いに小野救済カンパを起してもらおうから……」大体女事務員たちのやることだ、と下目に見た態度がみんなにある。『舗道』>
 - 17 「時間がありませんから、お風呂はあとにしてくださいね」「きみは、泊って行けないのかい」『炎』
 - 18 <「しなさい」は「しろ」に比べると使用頻度は高いだろう。「しなさい」による「命令」は、教師が学生に対して、あるいは親が子供に対して指示をしているといったニュアンスを帯びているように感じられる。>宮崎和人・野田春美・安達太郎・高梨信乃 2002『新日本語文法選書4 モダリティ』(くろしお出版) P 48

- 出典資料 (*つきの作品は青空文庫に収められたものである)
- 赤川次郎 『死者の学園祭』 角川書店 1983年 (『死者』)
- 五木寛之 『わが憎しみのイカロス』 文藝春秋 1977年 (『わが』)
- 『男と女のあいだには(下)』 新潮社 1982年 (『男下』)
- 内館牧子 『思い出にかわるまで』 角川書店 1993年 (『思い出』)
- * 海野十三 『怪塔王』 三一書房 1989年 (『怪塔王』)
- * ————— 『爆葉の花籠』 三一書房 1990年 (『爆葉』)
- 円地文子 『あざやかな女』 新潮社 1965年 (『あざ』)
- 太田蘭三 『誘拐山脈』 祥伝社 1980年 (『誘拐』)
- 恩田陸 『ライオンハート』 「春」 新潮社 2004年 (『春』)
- 『ライオンハート』 「エアハート嬢の到着」 (『エア』)
- 貴志祐介 『青の炎』 角川書店 2002年 (『青の炎』)
- 木山捷平 『大陸の細道』 新潮社 (『木山捷平全集 第一巻』) 1969年
- * 国枝史郎 『血曼陀羅紙帳武士』 講談社 1976年 (『血曼』)
- 黒岩重吾 『西成山王ホテル』 角川書店 1970年 (『西成』)
- 黒木瞳 『私が泣くとき』 幻冬舎 1994年 (『私が』)
- 源氏鶏太 『明日は日曜日』 集英社 1981年 (『明日』)
- * 坂口安吾 『街はふるさと』 筑摩書房 1998年 (『街は』)
- 佐多稲子 『振りむいたあなた』 講談社 1961年 (『振り』)
- 志茂田景樹 『悪魔の宿る森』 徳間書店 1985年 (『悪魔』)
- 陣出達明 『はやぶさ奉行』 春陽堂書店 1961年 (『はや』)
- 田中芳樹 『創竜伝6 染血の夢』 講談社 1995年 (『創竜』)
- 田辺聖子 『ほとけの心は妻ごころ』 角川書店 1980年 (『ほとけ』)
- 辻仁成 『カイのおもちゃ箱』 集英社 1994年 (『カイ』)
- 津村節子 『女の椅子』 集英社 1984年 (『女の』)
- 『炎の舞い』 文藝春秋 1981年 (『炎』)
- 寺久保友哉 『恋人たちの時刻』 新潮社 1979年 (『恋人たち』)
- * 直木三十五 『近藤勇と科学』 文藝春秋 1930年 (『近藤』)
- * ————— 『南国太平記』 文藝春秋 1989年 (『南国』)
- 夏樹静子 『女検事霞夕子 螺旋階段をおりる男』 中央公論社 1996年 (『螺旋』)
- * 夏目漱石 『明暗』 筑摩書房 1988年 (『明暗』)
- 鳴海章 『スーパー・ゼロ』 集英社 1993年 (『スー』)
- 仁木悦子 『赤い猫』 講談社文庫 1984年 (『赤い猫』)
- 『赤い猫』 「乳色の朝」 (『乳色』)
- 『赤い猫』 「青い香炉」 (『青い香炉』)
- 『赤い猫』 「白い部屋」 (『白い』)
- 『赤い猫』 「うさぎさんは病気」 (『うさぎ』)
- 『赤い猫』 「子をとろ 子をとろ」 (『子をと』)
- 『三日間の悪夢』 「恋人とその弟」 角川文庫 1980年 (『恋人と』)
- 『一匹や二匹』 角川書店 1987年 (『一匹』)
- 野上弥生子 『野上弥生子短編集』 (『死』)
- 『真知子』 新潮社 1966年 (『真知子』)
- 畑山博 『海に降る雪』 講談社 1976年 (『海に』)

- * 林不忘 『丹下左膳 日光の巻』 山手書房新社 1992年 (『日光』)
 藤木靖子 『愛の十字架』 「不吉な予感」 集英社 1978年 (『不吉』)
 皆川博子 『旅芝居殺人事件』 文春文庫 1987年 (『旅芝』)
 * 宮本百合子 『二つの庭』 新日本出版社 1979年 (『二つ』)
 * ————— 『氷蔵の二階』 新日本出版社 1979年 (『氷蔵』)
 * ————— 『道標』 新日本出版社 1980年 (『道標』)
 * ————— 『舗道』 新日本出版社 1979年 (『舗道』)
 村上春樹 『村上春樹全作品⑥ノルウェイの森』 講談社 1991年 (『ノ』)
 森村桂 『青春がくる』 講談社 1968年 (『青春』)
 森村誠一 『恋人関係』 角川書店 1988年 (『恋人関係』)
 山田太一 『終りに見た街』 中央公論社 1984年 (『終り』)
 山村美紗 『花嫁は容疑者』 徳間書店 1986年 (『花嫁』)
 * 夢野久作 『お菓子の大会』 筑摩書房 1992年 (『お菓子』)
 渡辺淳一 『愛のごとく (上・下)』 新潮文庫 1987年 (『愛 (上)』 『愛 (下)』)
 ————— 『パリ行最終便』 新潮社 1977年 (『パ』)
 ————— 『遠き落日 (下)』 角川書店 1982年 (『遠き (下)』)
 ————— 『男というもの』 中公文庫 1998年 (『男と』)

参考文献

- 工藤浩 1982 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」 (国立国語研究所『研究報告集3』 秀英出版)
 佐藤里美 1992 「依頼文 —してくれ、してください—」 (『ことばの科学5』 むぎ書房)
 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』 (むぎ書房)
 高橋太郎 1974 『言語生活』 270号 「標準語の動詞と京都弁の動詞」 (筑摩書房) (のち1994『動詞の研究』 むぎ書房にも所収)
 ————— 1975 『幼児語の形態論的分析 —動詞・形容詞・述語名詞—』 (国立国語研究所 秀英出版)
 —————ほか 2005 『日本語の文法』 (ひつじ書房)
 趙彦志 2007 「依頼表現「～てくれ、～てください」の考察—日中対照研究を目指して—」 (『対照言語学研究』 17 海山文化研究所)
 陳常好 1987 「終助詞 —話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」 (『日本語学』 6—10 明治書院)
 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 (ひつじ書房)
 宮崎和人・野田春美・安達太郎・高梨信乃 2002 『新日本語文法選書4 モダリティ』 (くろしお出版)
 村上三寿 1993 「命令文 —しろ、しなさい—」 (『ことばの科学6』 むぎ書房)